

【フリーペーパー】季刊

有志舎の出版情報と歴史・歴史学

CROSS ROADS

VOL. 07

2021年1月30日

はじめに

永滝 稔（有志舎代表取締役）

〈著者エッセイ〉

「あらゆる苦難は米国に由来する」を問う

吉村慎太郎（広島大学教授）

〈芸術エッセイ 狂言師の日々①〉

狂言との日々

奥津健太郎（能楽狂言方和泉流）

〈私が見た戦前の中国・台湾⑦〉

開封での生活（その1）

永滝 勇（有志舎取締役）



有限会社 有志舎

はじめに

永滝 稔

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い申し上げます。

さて、ここに『CROSS ROADS』第7号をお届け致します。

本号は、昨年、『改訂増補 イラン現代史』を刊行していただいた吉村慎太郎さんにエッセイをご執筆いただきました。イランをめぐる日本での報道がいかにアメリカ中心で偏ったものかがお分かりいただけるだろうと思います。詳しくは、ぜひ本書をお読みいただきたいです。

また連載は新しく「狂言師の日々」が始まりました。狂言師の奥津健太郎さんに伝統芸能である狂言について紹介していただきつつ、その現代的で新しい試みについて執筆いただきます。きっと、「伝統芸能」というものへの見方が変わると思います。

そして、永滝勇の「連載 私が見た戦前の中国・台湾」は、開封での生活についてです。日中戦争下の最前線で庶民はどんな生活をしていたのか、ある意味、貴重な証言かとも思います。

それから、このページの下の広告には有志舎だけでなく、高円寺の古書店・ブックカフェ・酒房である「コクテイル書房」も加わりました。大学研究室などの蔵書整理・買取などの経験も豊富な古書店です。研究者・読者の皆さん、ぜひ、お声がけください。

新年とはいえ、コロナ禍ではありますが、何とか頑張っていきましょう！。

本のかたづけ、 てっだいます。

もう読まないなあ、でも、すてるのは…
だれかに読んでもらえるなら、手ばなせるけど…
——本棚に詰まったそういう本たちを、
読みたい本と入れ替えてみてはどうでしょう。
ご不要になった本を、買い取らせていただきます。
買い取れない本も、無料でお引き取りいたします。
そんな本たちは「まちのほんだな」に並んで、
あらたな読み手に出会う日を待てましょう。
まずは、お気軽にご相談ください。

※「まちのほんだな」とは…
誰かに読んでもらいたい本と自分が読みたい本を、
金銭を介さず交換できる、みんなの本棚です。

古書買取 コクテイル書房

☎070-6430-2603 ✉cocktailbooks@live.jp

つくられる「農村女性」 戦後日本の農村女性政策と
エンバグメントの物語 岩島 史著 4800円
「女性の活躍」が女性蔑視をその裏面に貼り付けながら表面的に叫ばれる現代。その同
じ土俵に乗らずに、女性たちの過去、現在、そして将来を描き出す言葉を探す試み。

イラン現代史 従属と抵抗の二〇〇年 改訂増補 2400円
吉村慎太郎著 イランの本当の姿を知るために、さらに二〇〇
一年、二〇一九年に至るイラン政治と国際政治の激動に関する新章を加えた新版。

明治国家形成期の政と官 明治維新史学会編 4400円
幕藩制国家から明治国家へと、組織や制度の大転換がなされる中、その推進主体とな
った「人」に注目しながら明治維新期の政治と行政を考える。 (明治維新史論集②)

戦争・革命の東アジアと日本の「コミニスト」 1960年 2800円
黒川伊織著 東アジアのコミニストは、戦争と革命の20世紀をいかに生き、い
かに出会う、そして別れていったのか。もうひとつの日本共産党史！

ベ平連とその時代 身ぶりとしての政治 2800円
平井一臣著 「身ぶり」を通して人びとに反戦を訴え理解や共感を広げていくこと
を試み、新しい政治空間を模索していったベ平連の運動を現代史の中から描き出す。

有志舎

東京都杉並区高円寺南 4-19-2-1F (価格は税別)
TEL 03-5929-7350 FAX 03-5929-7352

「あらゆる苦難は米国に由来する」を問う

吉村慎太郎

大学院修士課程の時代からイランの現代史に関わりを持ち始め、既に40年以上が経過した。学部時代はインドのイスラーム聖者崇拝に関心があり、イランの歴史を特段勉強した記憶はない。だからこそ、大学院進学後はまず、故加賀谷寛先生の『イラン現代史』を熟読した。重要な個所に赤線を引き、いつしか全文が真っ赤になった。

以後、イラン現代史研究を続けてこれたのは大学院時代の恩師の助言もあるが、何よりこの国の激動の歴史に魅了され続けたからである。立憲革命(1905-11年)に始まり、その後数多くの重大事件・運動を経て、53年に挫折を余儀なくされる石油国有化運動の結果、米国が支援する第二代パフラヴィー国王モハンマド・レザー独裁時代が始まる。そして、79年イラン(・イスラーム)革命によってその国王体制も崩壊し、イスラーム共和政という新たな時代を迎えた。しかし、その翌年にはイ・イ戦争が勃発し、終戦の翌89年の最高指導者ホメイニーの死去後も、イランの激動の歴史は今も続いている。

こうした歴史プロセスに常に見え隠れするのは、英露、米ソの度重なる脅威、圧力、介入、そして大国支配と反動的な国内政権の成立という現実である。しかし、イランの人々はそれら支配を甘受しても、再び敢然と立ち向かい抵抗を繰り返してきた。まさに「七転八起」の歴史である。そうした中で79年革命後、米・イ関係の険悪化が今や最も注目される。その原点は米国の対中東政策に溢れた不条理にある。

日本のメディアでは、米・イ関係悪化の出発点が革命直後の79年11月に発生した在テヘラン米国大使館占拠・人質事件にあるかのごとく、まことしやかに語られる。他方で、イ・イ戦争下で暴露された米国の対イラン秘密武器取引(「イランゲート」)スキャンダルに言及されることは少ない。それぞれ民主党カーター政権期と共和党レーガン政権期に発生した両事件は、政権

政党の別なく米国の国家的威信を傷つけた。だが、それらも米国から見た関係悪化のプロセスでしかない。イランの視点に立ってより重要なのは、米国歴代政権がパフラヴィー国王独裁に加え、聖地エルサレムを含むムスリムの土地パレスチナを不法占領するイスラエルを支援し続けてきたという不条理にこそある。

確かに、米国のイスラエル支援は異常である。1948年のこの国の建国に際し、時のトルーマン政権はパレスチナ分割決議(181号)に反対、或いは棄権する国々に圧力を加え、承認に必要な3分の2以上の賛成票を取り付けた。1967年戦争(「第三次中東戦争」)では米国政府は、パレスチナ全土だけでなく、エジプト領シナイ半島とシリア領ゴラン高原をも占領したイスラエルに制裁が科せられないように暗躍し、安保理では拒否権を駆使して対イスラエル非難決議を阻止した。年間10億ドル以上もの無償資金を供与し、イスラエルがそれを軍事予算に転用しようとお構いなしである。さらに、フランスの協力下で50年代より本格的に開始されたイスラエルの核兵器開発計画にも、米国はIAEA(国際原子力機関)の査察を受けずに済む措置を講じた。

対米追従の「国際社会」も、不法占領と核兵器開発に顕著なイスラエル優遇の「二重基準」を黙認する。ユダヤ人差別迫害に無関係ではないヨーロッパ諸国の過去の罪への「贖罪」、ユダヤ(シオニスト)ロビーに左右される米国の影響力がそれに深く関わっている。日本も「寄らば大樹の陰」の政治姿勢にしがみつki、決して抗うことはしない。

この4年間、「米国第一主義」、「分断拡大政治」を特徴としたトランプ政権は、これまで以上に公然と不条理をゴリ押しした。イラン「核開発疑惑」の解決のために漸く合意に達したJCPOA(「包括的共同行動計画」)からの一方的離脱、エルサレムへの首都移転を願うイスラエルの意向に沿ったテルアビブからの大使館移転が好例で

ある。後者にアラブ諸国の反発が表面化するや、UAE（アラブ首長国連邦）やバハレーンなどとの対イスラエル国交樹立を画策し、アラブ分断に動いた。米国内で沈潜していた人種差別も含め、「コロナ禍」がトランプ禍に追い打ちをかけたといっても言い過ぎではない。

このように見ると、「今日、あらゆる苦難は米国に由来する」との故ホメイニーの批判が想起される。沖縄で犯罪行為を犯した米軍兵士の逮捕・捜査権に制約を設ける「日米行政協定」のイラン版が1964年10月、国王政権下の議会で可決された。上記はそれに反対した声明の一節である。イラン内政への干渉を繰り返した英露（ソ連）とイスラエルをも槍玉に挙げたその声明は、半世紀後の今も、米国主導の「非民主的な」国際政治を鋭く言い当てている。

次々と中東アラブ諸国が米国の圧力に屈していく中で、反イスラエル姿勢を崩すことのないイランに対して、トランプ政権は経済制裁を再開し、国民生活を窮地に追いやっている。イランの人々を利用し、現体制崩壊を狙う大国の身勝手な思惑が透けて見える。実際、それに誘発された惨事も繰り返されてきた。多くの国民の反発に直面するイラン政府は苦し紛れに対中接近を加速し、それが中国の政治・経済力強化の材料にもなる。

この原稿執筆中、日本メディアも連日、米国大統領選挙の開票結果を報道した。ある番組のコメントーターは、トランプとバイデンのいずれが勝利しようと「大事なのは日米関係だ」と主張した。その対する反論も出ないところに、トランプ再選の悪影響が巡りめぐって日本政治をさらに歪める認識がないように見える。他方、イラン国内のツイッターではトランプ再選を期待する声が数多く聞かれた。現体制崩壊と、米国の一層の国際的孤立化という相反する期待がこうした声の背景にあるようである。

本誌が読者の眼に触れる頃、既にバイデン新政権は動き出しているに相違ない。コロナ感染対策はもとより、中東絡みでは先のJCPOA離脱問題、在エルサレム大使館移転を含むパレスチナ問題、さらにシリア内戦、イラクやアフガニスタンの政情不安、IS対策など、重大な課題が山積する。バイデン新大統領の訴えた「米国が再度尊敬される」ためには、オバマ時代への回帰では済まされない。上記課題に関わる多くの苦難がそもそも「米国に由来する」事実を自覚しつつ、「二重基準」をはじめとする不条理に、バイデン新政権がどう向き合うかが今後問われていく。さもなくば、「大なる悪」から発した「小なる悪」も決して消え去ることはない。

Information



『改訂増補 イラン現代史—従属と抵抗の100年—』

吉村慎太郎 著

四六判、ハードカバー

280 ページ

定価（本体 2,400 円＋税）

ISBN978-4-908672-39-2

狂言との日々



奥津健太郎

今回から4回に渡って連載をさせていただきます、能楽狂言方と泉流の奥津健太郎と申します。少し専門的な自己紹介になってしまいましたが、世間ではしばしば「狂言師」と紹介されます。

伝統芸能の能と狂言をあわせて「能楽」と言います。江戸時代までは「猿楽」と呼ばれていましたが、明治時代になってから「能楽」というようになりました。能と狂言は室町時代から約650年の長い歴史がありますが、「能楽」はまだ140年ほどしか使われていない新しい用語なのです。

能楽を演じることを職業にしている人を能楽師と言います。ですから、狂言師も能楽師に入ります。私たちは完全分業制で、能楽の中で狂言を担当する職方を「狂言方」と言います。能の主演（シテ）や後見、地謡などを担当する「シテ方」、相手役を演じる「ワキ方」とともに立役です。狂言方はいわゆる狂言（本狂言）を演じるほかに、間狂言^{あいまようげん}といって能にも役があります。楽器を担当するのは「囃子方」ですが、囃子方も分業なので、笛方、小鼓方、大鼓方、太鼓方に分かれます。そしてそれぞれに流派があります（本当に細かいですね!）。

私は狂言の家として400年以上の歴史がある野村又三郎家の門下なので、「能楽師狂言方と泉流の奥津健太郎」ということになりますが、「師」は師匠・教師など、教える意識が強いように思い、現在はあえて「師」のない肩書を使っています。

狂言との出会い

今回は私が狂言に携わる中で、大きな影響を受けたいくつかの出来事をご紹介しますと思います。

まず、本当によく受ける質問ですが、なぜこの世界に入ったのかということについてお話しします。能楽界には、代々、舞台を家業として継いでいる方々と、外から入った方々がいて、

私は後者です。伝統芸能との出会いは中学生の時、学校でチケットをもらったのがきっかけで歌舞伎が大好きになり、中学3年間は毎月、劇場通いをしていました。その後、進学した高校に（なんと!）能の部活があり、興味を持って入部、初めて能に触れました。そして、それを見たクラスの友人が学校外で狂言が習えると誘ってくれ、故十三世野村又三郎信廣師に入門したのです。偶然に偶然が重なった結果ですが、一緒に入門した友人、野口隆行氏も現在まで共に舞台を勤めています。

亡師について

入門時、師は六十代後半でした。精力的に舞台を勤め、稽古も大変熱心でした。実年齢よりも随分若い雰囲気をお持ちでしたが、先の大戦で太平洋のキスカ島に出征、戦後はシベリアに抑留され、帰国なさった時には御父上でもある先々代は亡くなっておられたそうです。想像もできないご苦労の中、又三郎家の継承者として2007年に86歳で亡くなる直前まで舞台に立たれ、育てていただきました。今日、私たちが伝統芸能に接することができるその裏には、長い歴史の中で芸を継いできた有名無名の人々の必死の努力があります。師が来る日も来る日も淡々と狂言に向かう姿勢は、今も鮮明に思い出されます。このことは、後を継がれた当代又三郎師の下、舞台活動が続ける大きな原動力になっています。

息子について

現在、高校2年生になる息子・健一郎は1歳から亡師の稽古場に来るようになりました。5歳で初舞台を踏み、今では稽古や舞台に積極的に加わって青年狂言師を目指して稽古を重ねています。これまでにスイス・ドイツでの巡回公演、中国での舞台等に参加し、国際交流にも意欲を見せています。

息子の稽古を始めたころ、ある方に言われたことがあります。「君は大事な子方（子役）時

代を経験していない弱みがあるけれど、子の稽古を通して経験できる可能性がある」と。その時は意味が良く分からなかったのですが、息子の稽古を始めてみると、大人の声域を越えた高さで稽古をしなければならず、自身の喉を壊しそうになったり、子の身体を生かすような大きく動く稽古が必要だったり、今までの自分自身にはないものを多く求められました。教えていながら教わること、人間的な成長を子どもたちから学ぶことも多く、現在も狂言を習う子どもたちのお稽古を、やりがいのある仕事として取り組んでいます。

伝統芸能の力

狂言に携わっているとしばしば、「高尚ですね。敷居が高いです。どこでやっていますか。何を着て観に行けばよいのですか」ということを言われます。狂言の台詞は江戸時代初期の話し言葉なので、慣れないと聞き取りづらくかもしれません。敷居が高い原因は演者側にあるとも思います。そのうえで、ぜひストレートに狂言を見ていただきたいと思っています。狂言が現代に生きることはできるのか、という問いは私の中に常に存在しています。しかし、それを全く覆してしまった経験もあります。

それは、今から10年前に始めた「親子でたのしむ狂言の会」でのことです。息子が幼稚園に通っていたころから、同年代の子どもたちとその保護者の方々に狂言をご覧いただく機会が増え、様々なやりとりの中で、演劇好きな方が母親になると劇場に行きづらくなるという声も伺いました。そこで、年齢による入場制限がない公演を開催できないか、と思い、第1回公演を企画、準備を進めていました。ところが公演20日前に東日本大震災が発生したのです。

突然の大災害で、子どもも大人も大きな不安を抱える中、やっとの思いで迎えた開催当日、客席には大勢の子どもたちが解放されたように大笑いする姿があったのです。思いもよらない子どもたちの姿は大きな衝撃でした。その光景を目の当たりにして以来、現代に生きる狂言とは何かを模索し続けています。狂言が生まれ発展してきた時代は、非常時の連続だったことでしょう。明日の命もわからない時代の人々が愛し続けた狂言の持つ大きな力は、現代社会では隠れてしまっているかもしれません。でも、その力を現代に生かしたいと願って活動が続けています。今後の連載では、私の様々な試行錯誤をお話していきたいと思っています。

Information

オンライン狂言ワークショップへのお誘い

どなたでもお気軽にご参加いただけるオンライン狂言ワークショップを、原則毎月、無料で開催しています。奥津健太郎と息子の健一郎でご案内や実演をさせていただきます。

ぜひご参加ください！

開催日：2021年2月14日（日）

2021年3月21日（日）

開催時間：15時00分～15時45分

参加費：無料

お申し込み：以下のサイトにあるリンクからお申し込みください。折り返し、参加URLをお送りいたします。

サイトには活動の最新情報も掲載しています。

ぜひご覧ください。

<https://kyogen-okutsu.amebaownd.com/>





開封での生活(その1)

永滝 勇

この開封という街は高い城壁に囲まれていて、東西南北に門があり、そこは常時日本軍の歩哨が守っていて、出入りは厳重にチェックされていた。従って城内はまったく最前線とは思えないほど賑やかで、人の往来も多い。さすがに日本人よりは圧倒的に中国人が多かったが、かといって日本人を好奇な目で見るようなこともない。何もなければきわめて閑で平和な街であった。

父が勤務する華北電電公司は、周囲を煉瓦塀で囲まれ、正面の門を入ると車回しの先に事務所がある。その一角に無電室があり、父は常時この部屋に詰めていた。その建物の両脇の通路を奥に進むと広い中庭があり、その中庭を挟んで平屋建ての家屋が並び、そこが職員の社宅になっていて私たちはそこに住んでいた。

日本人は、支店長と奥さん、それに単身赴任の若い男性と我が家だけ。あとは中国人の男女職員という構成。着任した夜に中国兵の襲撃があり、その後も城壁の外では小競り合いがあったらしいのだが、城内は実に平和でとても最前線とは思えないのんびりとした生活ぶりだった。

私はここで小学校に入学した。1940年(昭和15)4月のことである。入学式の時に家の前で母親と一緒にとった写真が今でも残っている。ざくろの木の傍で慶応幼稚園舎のような服をきているのがそうなのだが、別にこれが制服ではなかった。小学校は社宅から歩いていける距離だったので、そんなに遠いところにあったとは思えないし、全部が日本人の子弟で生徒数も多く、とても最前線にある小学校とは思えないほど校舎も校庭も広々としていた。

その後、この小学校には三年生のはじめま

でいたと思うが、その間に父がバセドー氏病のために一時東京の病院に入院し、私も母と共に日本に帰り、父が回復後再び現地に戻るということもあった。

開封での生活は、内地とは違い驚くような事がたびたびあった。夜になると窓ガラスの外側にヤモリがへばり付いて蠢いている。多い時は10匹ちかくがウネウネとしているのだ。しかし現地の人は、あれは人畜無害だから放っておけばいいとの事。変なもので馴れてくると別に家の中に入ってくる訳でもないし傍によるとさっと逃げていく、いたずらに尻尾を捕まえると何と自分で尻尾を切り離して逃げていくのだ。それが面白くて随分といたずらをしたものだ。

ある日の朝、いつものように布団をたたもうとしていた母が突如「ギャー」と言って飛び退いたのである。私の寝ていた枕の下にえび蟹のような形をした10センチ位の生き物が蠢いていたからだ。何も知らない私は、傍にしゃがんで素手でこれを掴もうとした時、父が物凄い勢いで私を突き飛ばし

「触っちゃいかん！これはサソリだ！」と叫んだのである。サソリって何だ？父の勢いにびっくりした私は思わず泣き出してしまったのだが、あとでサソリの尻尾に刺されるとその猛毒で死んでしまうと聞きゾッとしたのであった。考えてみると、枕の下に潜り込まれていたのに、よく刺されなかったものだと思う。私は妙なところで命拾いをする事がその後もあるのだが、これもその一つだろう。

© 有限会社 有志舎

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 4-19-2、クラブハウビル 1 階

TEL 03-5929-7350

FAX 03-5929-7352

mail: yushisha2005@gmail.com

URL: <https://yushisha.webnode.jp>

DTP…言海書房

無 料
(禁転載)